

2021年1月31日 説教「愛の灯をともし教会」

創世記 47章 1～12節

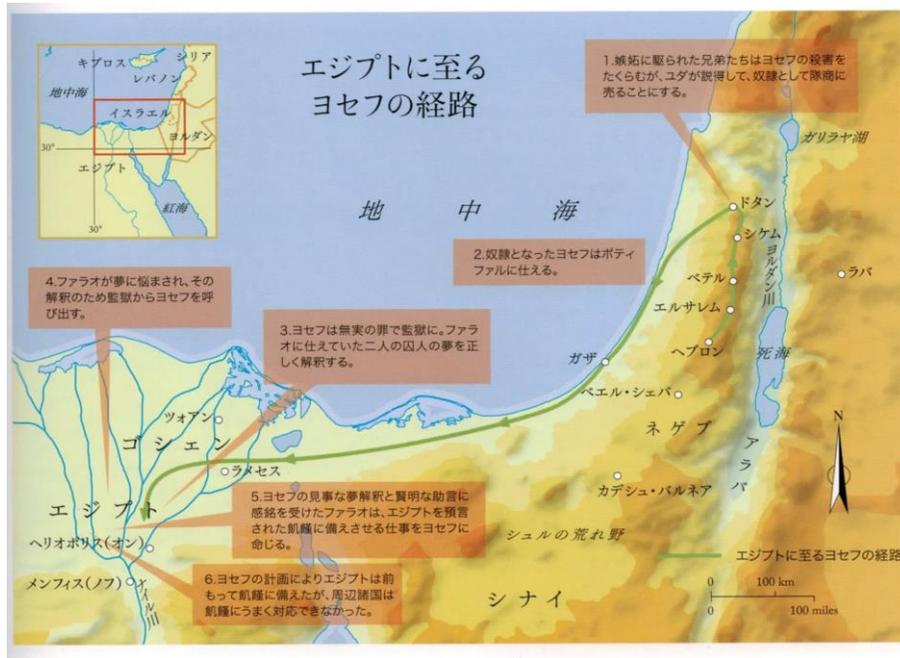
ヤコブ（イスラエル）は、ヨセフと再会を果たし、「もう死んでも良い」と述べるほどでした。ヨセフも父の首にすがって泣き続けました。

1. パロを訪問したヨセフと五人の兄弟達（1～4節）

- ①ヨセフの報告（1）「**ヨセフはパロのところに行き、告げて言った。『私の父と兄弟たちと、羊の群れ、牛の群れ、そして彼らのものすべてがカナンからまいりました。そして今ゴシェンの地におります。』**ヤコブと再会を果たしたヨセフは、パロ（エジプト王）の所に行き、カナンの地から家族が、家畜をも連れて、ゴシェンの地にやって来たことを報告します。それは、すでにパロ自身が温かな勧めをしてきていたこと（45章16～）にも基づいていますが、その後のことを任せられていたヨセフが、到着を伝えたのです。
- ②パロの質問（2～3）「**彼は兄弟の中から五人を連れて、パロに引き合わせた。パロはヨセフの兄弟たちに尋ねた。『あなたがたの職業は何か。』**彼らはパロに答えた。『**あなたのしもべどもは羊を飼う者で、私たちも、また私たちの先祖もそうでございます。』**そして、ヨセフは兄弟達の中から5人を、パロに会わせたのです。おそらくユダと長男ルベンが入っていたでしょう。彼らへのパロの質問は「あなたがたの職業は何か」でした。ヨセフによって想定されていた問いでありました。そこで、彼らは教えられていた通りに答えます。「私たちは先祖から羊飼いです」というものです。政治的野心など全くないという表明でもありました。王としては確認しておかねばならないことでした。
- ③兄弟達の答え（4）「**彼らはパロに言った。『この地に寄留しようとして私たちはまいりました。カナンの地はききんが激しくて、しもべどもの羊のための牧草がございませんので、それでどうか、あなたのしもべどもをゴシェンの地に住まわせて下さい。』**彼らはカナンの地の実状を伝えます。つまり、カナンは飢饉がひどく、羊達の食糧である牧草がなく、このままでは動物達の命が危ういこと、ゴシェンの地には食む牧草地があるので、ぜひ住まわせてくださいと懇願したのです。確かにゴシェンの地は牧草地が広がっていたのです。

2. パロの勧め（5～6節）

- ①確認（5）「**その後、パロはヨセフに言った。『あなたの父と兄弟たちとがあなたのところに来た。』**パロはヨセフに、ヨセフの父と兄弟達とがヨセフの所に身を寄せて来たのだと言ったというのです。ヨセフに確かめているのです。これまでの経緯から、パロも何か不思議な力がそこに働いているということを感じたのではないのでしょうか。
- ②ゴシェンの地に（6）「**エジプトの地はあなたの前にある。最も良い地にあなたの父と兄弟たちとを住ませなさい。彼らはゴシェンの地に住むようにしなさい。』**「エジプトの地はあなたの前にある」、という



言い方は、宰相といえども家族のことで遠慮もします。そこで、パロの方で「最も良い地にお父さんと兄弟たちを住ませなさい」「ゴシェンの地に住むように」と、背中を押してくれているのです。

- ③家畜の係長に(6)『もし彼らの中に力のある者がいるのを知っていたら、その者を私の家畜の係長にしてください。』パロの激励はそればかりではありませんでした。家畜の管理において優れた者がいるのなら、その人をエジプト付けの家畜係長にしてくださいと伝えてくれたのです。いわば就職斡旋をしているようなものです。エジプトに元々いる羊飼達の上に立たせることにも協力してくださろうとしていたのです。兄弟達がエジプトで一定の立場をとれるような配慮です。

3. イスラエルの民のエジプトでの定着地 (7~12 節)

- ①パロのヤコブへの質問 (7~8)「それから、ヨセフは父ヤコブを連れて来て、パロの前に立たせた。ヤコブはパロにあいさつした。パロはヤコブに尋ねた。『あなたの年は、幾つになりますか。』」さらに、ヨセフは父ヤコブをパロのところに連れて行きます。パロもヨセフの父には興味があったことでしょう。あの夢を解き明かしてから、宰相へとになっていったヨセフのことを思いました。また、ヨセフの父親がこのヨセフを育て、17歳の時にその子を失った父ヤコブのことに思いをはせたのではないのでしょうか。その人生を思いながら、「あなたは何歳になったのだ」と尋ねたのです。
- ②ヤコブの応答 (9~10)「ヤコブはパロに答えた。『私のたどった年月は百三十年です。私の年の年月はわずかで、ふしあわせで、私の先祖のたどった年の年月には及びません。』ヤコブはパロにあいさつして、パロの前を立ち去った。」ヤコブは130歳と伝えます。アブラハムが175歳(25:7)、イサクは180歳(35:28)で命を終えたのに比べれば、まだ若いと言えないことはありませんが、大変な長寿です。彼自身が「ふしあわせで」とあるのは、「苦しみ多く」(新共同訳)というほうがわかりやすいですね。兄エサウとの確執に20年、ヨセフを失って20年という辛さもありました。でも、再会したのですから恵みを得たということでありましょう。それから、彼は挨拶をして、パロのもとを退出しました。
- ③ラメセスの地に(11~12)「ヨセフは、パロの命じたとおりに、彼の父と兄弟たちを住ませ、彼らにエジプトの地で最も良い地、ラメセスの地を所有として与えた。またヨセフは父や兄弟たちや父の全家族、幼い子どもに至るまで、食物を与えて養った。」ヨセフはそれらの経過後に、パロの命令通りに、家族をエジプトのゴシェンの中でも、牧畜に最も適しているラメセスの地をあてがったのです。また、家族の胃の腑についても配慮しました。ここしばらくは食糧が足りずに、栄養不足に陥っていた親族もあったでしょう。幼きから年長者までに、ヨセフはたっぷりと食事を与えたのです。

《結論》ヨセフはパロに家族来訪の報告。パロもそれに応じてゴシェンの地を家族達に使わせるように指示しています。そして、パロは五人の兄弟達とも会います。パロとの質疑応答の場面があります。兄弟達は率直に、自分達が羊飼いであって、カナンの飢饉の間、牧畜ができる場所を与えてもらいたいという旨を伝えました。この応答については、ヨセフからアドニスをもらっていましたが、兄弟たちもその通りに応答したのです。ここで学びたいことは、ヨセフがとるべき手続きを外すことなく、行っているということです。週報裏ページに、キリストが「小さな事に忠実であれ」との教えをされたことを記しておきました。家族の居住と働きを、パロの意志によって決定してもらうことは極めて大事なことで、既に大筋は決まっていたこととはいえ、怠ってはいけないプロセスであり、ヨセフは「忠実な賢いしもべ」(マタイ 24:45)であったと言えるでしょう。そのようなしもべに私どももならせたいのですが、その秘訣はキリストにしっかりとつながることです。

さて、この聖書箇所からもう一つ学びましょう。神学の学びに「教会史」があります。文字通り、教会の歴史を学びます。私たちの教会史の教師は教会の歴史を、「教権と俗権」という視点からそれを解きほぐしてくれました。今朝、私たちはヤコブ(イスラエル)とパロ(エジプト王)の出会いの場面を読みました。この時代において、ヤコブの家族は総勢でも70人。一方のエジプトは古代文明から発展してきた、当時の大国です。聖書に出て来るパロが誰であるのかは特定できませんが、エジプトの15、16王朝時代あたりではないかと言われます。族長ヤコブとパロが会っていますが、ヤコブ一家はただ大きな温情と援助を受けている関係です。しかし、ヤコブ(イスラエル)の群れは神の民として、旧約を経てイエス・キリストにまでつながり、その霊的な広がり、全世界へと広がっていくのです。その面では両巨頭の出会いです。

あまりややこしいことは言いたくありません。でも、130歳の族長ヤコブは大国のパロと相対しても、風格が感ぜられるということです。教会もいかに小なりといえども、キリストの権を担っているのです。歴史においても現在においても、いかに世の中(俗)の権が強力であったとしても、教会はキリストという大なる後ろ盾をいただいて歩いていく存在なのです。キリストによって、俗権にはないもの、それは今年の御

言葉にある「信仰、希望、愛」でしょう。教会は「愛の灯」をもたらす役割をもっている存在です。世界の教会はもとより、私どもの小さな群れもこの地にあってそのようなミッションを与えられているのです。あのヤコブがパロと会った出来事は、教会と世の中との関係とも相通じます。この年も、進んでいきます。私たちの群れに与えられている大きな務めを少しでも進めていくことができますように。コロナ時代にあって、世は疲弊しています。「愛し合う群れ」として、キリストの愛の灯をともしていくことができるように、祈っていこうではありませんか。